

Title	山崎正一・岩崎武雄・原佑・未木剛博編「講座 現代の哲学第六巻」『現代文明論』
Sub Title	Essays on contemporary civilization, co-edited by Takeo Iwasaki & others
Author	多田, 眞鋤(Tada, Masuki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1959
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.32, No.4 (1959. 4) ,p.79- 83
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19590415-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

山崎正一・岩崎武雄
原 佑・末木剛博編 「講座 現代の哲學第六卷」

『現代文明論』

一 現代文明とは何か。それはどこから由來し、どこへ進むものであるか。この設問ほど現代人にとって切實な問題はほかにないであろう。哲學、歴史學、社會學、政治學等々あらゆる人文・社會科學の諸領域において、現代文明の實體を説明してゆこうとする試みは今や日常の協働作業にまで發展していると考へても過言ではなからう。

従來、社會哲學の一端に位置していたと考へられる「文明論」は、それが『現代』文明の段階に到つて、人文・社會諸科學の領域における問題意識となるまで發展して來たのであり、逆に言えば、「現代文明」の本質に關する價值意識を確立しなくてはあらゆる人文・社會科學にたずさわる者は、その對象とする問題に對する學問的態度さえも決定しえない狀況が生じて來たとも考へられるからである。

假に政治學の領域における權力構造の問題、あるいは又官僚制の問題をとりあげてみても、それらに關する思索、解明の過程において「現代文明」の要素をなしているメカニズム、テクノロジの問題に當面してくるのである。危機意識の強いヨーロッパ世界においては、戦後つとにこの「現代文明論」が歴史學者、哲學者、社會科學者、文學者等によつて論ぜられてゐる。例へば A・J・トインビー、K・ヤスパース、H・J・ラスキ、E・H・カー、K・マンハイム、G・ルカッチ、K・バルト、あるいは又 G・V・ゲオルギウ等々であり、「現代文明」の屬性である *danonisch* な性格に對して、それぞれの立場からの發言、警告をなしている。

世界、特にヨーロッパの精神科學界において、「現代文明」は今やそれが論ぜられるべき最大關心事の一つとなつて來ている。

以上の意味からも偶々講座「現代の哲學」第六卷に、この「現代文明論」をとりあげられたのは眞に當を得ているものといわねはならない。岩崎武雄教授が『現代文明論』が哲學の本來の課題であるかどうかは問題であるとしても、とにかく『現代文明論』が常に何等かの哲學的思想と結びつかないでは、行われることができないということは明らかである。何となれば『現代文明論』が現代文明に對する價值判斷を含まねば成り立たないことは言うまでもないが、かかる價值判斷を興えるということは決して單なる科學のなし

得ることではないからである。」と「あとがき」に述べておられるが、われわれもこの考えに對して全面的な賛意を表したい。

文明に對する人間の適應障害を生じている現在、文明の獨走は放置されるべきではなく、更に又「思想の科學」の時代は、「科學の思想」の時代に轉換すべきものであると考えるからである。

本書は次の七氏によつてそれぞれ分擔執筆されており、まとめて當初に掲げてみると、一、文明論と哲學(岩崎武雄)、二、現代世界における合理と非合理(中村雄二郎)、三、機械時代と人間性(佐々木妻夫)、四、現代文明と藝術(伊藤勝彦)、五、現代文明における社會科學の意味(日高普)、六、現代における東西の精神的方位——現代神秘思想の課題——(玉城康四郎)、七、傳統と近代化の問題(針生一郎)であり、更に各章ごとに引用された文献の解題が附録されている。以下の紹介においては比較的に政治學、政治思想周邊に關係ある若干の論説を對象とすることを豫めお断りしておく。

二 當初に順序として、岩崎教授の執筆になる「文明論と哲學」の要旨をみてみたい。

岩崎教授はA・トインビー、K・ヤスパース等の所説を引用されつつ、現代の危機的狀況をのべられ、「さて現代文明というものを哲學的に批判しようとするとき、そこに取り扱われなければならない主要なる問題は次の二つであると思われる。第一は現代文明の特

徴である機械文明に對する批判であり、第二は東西兩文明の批判檢討ならびにその評價ということである。」(四頁)とされ、第一、第二の問題が意味する内容を提示されつつ、「私がここで言おうとするのは、むしろわれわれがこれらの問題に對する解答を求めようとする際に注意しなければならないことがらについてである。」(八頁)と述べられ、安易な文明批評、問題をシンブルに處理してしまう精神主義をたしなめられている。

すなわち、「われわれが現代文明の批判を行うとき、われわれは極めて慎重な態度で觀察・分析を行い、決して混同・飛躍をおかしはならないということ、そしてそのためにはわれわれが自己の獨斷的な原理で現實の文明を簡單に割り切つて考えるのではなく、現實の事態を實證的によく探求することが必要である。」といわれ、「しかしながら第二に、われわれがいかに實證的な探求を行つても、それだけでは文明論は成立しない。文明論はその根底において哲學を必要としているのである。」(一六頁)と文明論における哲學の必要性を強調される。

次に中村雄二郎氏は、「現代世界における合理と非合理」というテーマのもとに、「日本人と合理主義」、「近代合理主義の背景にあるもの」、「近代合理主義のアメリカ的繼承」、「近代合理主義のドイツ的補強」、「現代合理主義としてのマルクス主義」、「合理主義と非

合理的なもの」という各項目に問題を整理されつつ、近代合理主義とその發展、補強および克服としてのアメリカ的合理主義、ドイツ的合理主義およびマルクス主義が、原理的にいかなる構造をもち、とくにそれらが非合理的なものといかなる關係に立つかについて概観され、合理主義におけるパターンを三つに整理されている。

すなわち、第一は、朱子學の合理主義、スコラ哲學の合理主義、ドイツ觀念論の合理主義等「形式上完全に割切るパターン」であり、第二は、現實を出来る限り對象化し、これを割り切つて行くパターンであつて、その原型としては近代科學であり、自然現象を對象化するのみにとどまらず、政治・社會・經濟現象、さらには心理現象をも對象化される限りに於いて近代科學はその對象とする。

次いで第三のパターンは「第一のパターンのように非合理的なものをニュートライズして温存するのでも、また、第二のパターンのようにそれを體系外に放置するのでもなく、それを外側から包圍して行つて、ニュートライズするだけでなく解消させてしまおうとするものである。」(四七頁)といわれる。

而して、中村氏によれば「現代世界に生きるわれわれにとつて、直接關係あるのは第二および第三のパターンの合理主義だが、ここでそのいずれもが『科學的』であることに注目」せねばならず、「現實が非合理であり、合理化を拒否すればこそ、われわれにとつ

て現實を合理的にとらえ、これを合理化する合理主義が必要なのだ。」(四八頁)といわれる。

然し、われわれがこの主張に對していささか疑問を抱くことは、合理主義、近代科學精神、機械、メカニズム、テクノロジー的現代文明という圖式において、現代文明のいわば根柢にある「合理主義」を aufheben すべきより高次元の思想が出現せねば現代文明に内在するディレンマは解決できないのではないかということである。例えば、古代ヨーロッパ社會、とくにギリシヤの世界においては、「自然」が萬物の基底をなすとの思想が存在し、中世に至つて「神」の觀念がそれにとつて代り、近世ルネッサンス以降、所謂「理性」が発見され、この「理性」が自然界、人間界の秩序を形成しているとの思考が支配的になつて來たのであり、この「理性」に合致すべきであるとの精神的態度が合理主義であるといえよう。然らば、ルネッサンス以降の「理性」の發見、合理主義が近代文明の諸様相を形成し來つたとすれば、近代文明の終局としての現代文明の段階において、「理性」に代るべき「何ものか」が問題なのであり、必然的に合理主義も又次の來るべき「何ものか」によつて止揚されなければならないのではなからうかということである。

三 次に佐々木斐夫教授の執筆になる「機械時代と人間性」をみてみたい。

佐々木教授は「技術的環境の展望」、「労働の機械化と自動化」、「組織の合理化と官僚制」、「マシニスム對ユマニスム」の四項目に問題を分けて論じておられる。

すなわち、K・マンハイム、G・フリードマンの所説を引用されながら現代機械文明のもとにおける人間の自己疎外現象を指摘され、「超體的な官僚化——グールドナー (A. Gouldner) のいう『世界の官僚化』 (the bureaucratization of the world)——は、下底からの機械化と相いまつて、人間性に新しい疎外をひき起し、人間關係を論理的にも感情的にも腐蝕させかけている。マシニスムの進行は私たちの文明を危機に瀕せしめているのである。私たちはこれに對してどのように對處したらいいのだろうか。」(七五頁)と提言され、疎外現象を三つの局面に分けられる。すなわち第一の局面は、「テクノロジーにかかわる事象であり、新しい段階のオートメーションが人間の作業労働や頭脳労働をマシニスムから完全に解放するにいたるかどうか」であり、第二の局面は「テイラリズムを先驅とするテクノクラシー思想が、工場と事務室に加えた『管理の合理化』という抑壓から發生している」種々の葛藤である。

さらに第三は「ビュロクラシーの重壓から派生したもので、第二の局面につき、無氣力な・絶望した労働者と事務者とは、どこまでいつてもついにその主體性を恢復できずに終るだろうか。」とい

う問題であるとされ、これらの種々の局面から生ずる人間の主體性の喪失を回復する方法として、L・マンフォードのいう「藝術の回復」を提唱される。

一人間は産業革命以後、技術に優位を委ねて、ひたすら外界のものと客觀的なものとを培つてきた結果、今日のように生活の全面的マシニスム化の危機をみずから産むにいたつた。したがつて救済策は、藝術における愛に即した表家的構成力によつて、マシニスムの過程のなかに、内的なものとの主體的なものとを養成することにある。」(八三頁)のであり、この「マシニスムの過度の進行をただすため回復しなければならない『藝術』とは、もちろん現代社會の他の諸機能と緊密に溶け合つて、時代的に限られた意味を擔わされている特殊な實踐的活動ではない。その基底に横わつている人間性の本源的な思考活動なのである。」(八四頁)と結言される。

最後に玉城康四郎教授の「現代における東西の精神的方位——現代神秘思想の課題——」の論説を紹介してみたい。

「現代はいろいろな意味で精神的な混迷にある。この混迷は周知のように第二次大戦以後には質的に變つてきた。巨大な機械文明の止まることを知らない發展に人類の精神は押しつぶされようとしている。このような文明と精神との宿命的な課題を展望し、これを解決に向わしめようとする新たな知性のエネルギーはまだどこにも見出

されていない。」(一四七頁)と「まえがき」され、現代の危機を救済の方向に向わしめようとするA・ハックスレーの「永遠の哲學」

(The perennial philosophy 1945)、『A・シュヴァイツァーの「文化と倫理」(Kultur und Ethik 1923)』、『インド思想家の世界観——神秘思想と倫理』(Die Weltanschauung der Indischen Denker — mystik und Ethik) 1934)、『ラダクリシュナンンの「東と西」(East and West 1935)』等に現れた思想を解説されつつ、「ハックスレー、シュヴァイツァー、ラダクリシュナンンは、東西の兩域にまたがりながら、しかも單に理論的な關心に満足することなく、それぞれの意味の實踐的な眞理を追究することに眞剣であり、したがって各自立場を異にしつつ共通の精神的方向が看取される。それは一語を以ていへば神秘思想である。」(一七四頁)といわれる。而して、現代世界における東西の精神的方位を示しているこの「神秘思想」そのものの有する内在的問題を検討され、佛敎哲學に言及されて「とまれ神秘性は、現代人にとつて至難を極めている課題ではあるが、時代そのものが今日程これを渴望しているのは曾てなかつたことではないか。」(一七八頁)と結ばれている。

四 現代文明に本質的に内在するデモニッシュな性格は、それを形成せしめて來た「人間」の主體性をも破壊しかけています。

すなわち、従來の人間對文明の關係は現代に至つて到錯し、人間

それ自體の物化現象すら生じて來ている。いわば最高の文明が最大の殺戮という矛盾をはらんでいるのである。

この危機的狀況を救済する方向に導こうとする努力はとりもなわず人間主體性の回復への努力でもある。科學優位の思潮に壓倒されてか哲學者の現實的發言が蔭をひそめていた最近の狀況において、本書のように「現代文明」という現實的にして深遠な問題を取擧げ、それを哲學的に解明してゆこうとする試みはまことに貴重なことであると思われる。

先にも述べたように、所謂「思想の科學」の時期はすでにその問題性が遠のいて來たかに思われる。それは今や「科學の思想」、換言すれば機械文明、科學時代の統一、思想的裏附けの時代に入つて來つつあるのではなからうか。科學に對する哲學優位の時代の到來をまたねば現代の精神方位はその指針を失うのではないであらうか。戦後、社會科學はそれが「科學」という名に値するため必要以上に「自然科學的思考」に接近しすぎたのではなからうか。そのため各問題の局面に關する研究は深化したというものの、人間關係學、價值關係學としての社會科學はパースペクティブの狹隘性に陥つてしまつていとも考えられるのである。

甚だ雜然とした紹介に終始し各執筆者の意のある處を看過してしまつたようであるが、これで拙筆したい。(有斐閣發行)(多田眞鋤)